

MANCHESTER BY THE SEA

マンチェスター・
バイ・ザ・シー



壊れかけた社会を救うやさしさを 悲しみを抱えて生きるすべての人へ

越えられない痛みからの再生 孤独な心に寄り添う傑作

今年のアカデミー賞主演男優賞と脚本賞のほか、各国で賞を総なめにした話題作が5月13日(土)から公開される。ユーモアに彩られたリアリティーあふれる脚本と、主演のケイシー・アフレックが見せた孤独と悲しみ、思いやりが見る人の世界を揺さぶり、涙を誘う。作家・高橋源一郎さんの視点で映画の魅力を語ってもらった。

兄が残した課題は 家族という可能性

非常にいい映画でした。叔父とおい、それぞれ大切なものを失った2人は、互いの不完全さを持ち寄り、家族を作り直せるのか……。誰の人生にもある家族の問題に鮮やかな解き方が示され、感銘を受けました。

世捨て人のように暮らしていた主人公リーは、兄の遺言でおいパトリックの後見人に指名されます。2人は戸惑いながらも「家族になる」という課題と向き合わなければなりません。自らの死期を予見し、弟を思い、息子を案じて2人に生きる道筋を与えた、この兄がすばらしい。リーはある出来事のため人間的な感覚を遮断していたのですが、パトリックとの関係を手探りしながら徐々に人間らしさを取り戻していきます。それこそが兄からのギフト。悲しい死が大きな愛に気づききっかけになっています。



他者を受け入れる 寛容が社会を救う

この映画で描かれているのは「他人の子どもの親になる」ということです。それはとても難しい。だが、主人公のリーには他の選択はありません。それはなぜでしょうか。リーは慟哭の中にいます。おいのパトリックも家族を失って喪失の深みから抜け出せません。しかし、失ったものは絶対に戻って来ないのです。だとするならば、再生のために何をしたらいいのか。そこで、初めてリーとパトリックは真正面から向き合うのです。話題になったアニメーション映画『この世界の片隅に』も、同じテーマを共有していますが、偶然とは思えません。失ったことを嘆くのではない。何かを失ったもの同士だけが新しい関係を作り出すことができるのです。他人の子を愛するには強い意志がいる。でも痛みにとらわれていても救われない



〈作家〉

高橋源一郎さん

たかはし・げんいちろう/1951年生まれ。作家、文芸評論家、明治学院大学教授。81年、『さようなら、ギャングたち』でデビュー。近著に『読んじゃいなよ!』(岩波新書)、『デビュー作を書くための超「小説」教室』(河出書房新社)、『丘の上のバカ ぼくらの民主主義なんだぜ2』(朝日新書)ほか。

んだというメッセージが伝わってきます。悲しみに閉じこもるのは逃避ではないのか。行動を起こし、そこから抜け出す努力をするのが人間のあるべき姿なのかもしれません。

今、社会には不寛容が広がっています。最小の社会は家族ですから、家族に他人を受け入れるのは、国という単位で考えると移民と共に暮らすというようなことでしょう。実は寛容こそ社会が生き延びる手段だと思います。そのことを理屈ではなく、じわじわと心に染みるように感じさせる映画です。

ラスト、叔父とおいはある結論を出します。これがまたリアリティーがあって、すてきな終わり方になっている。全体に余計な説明がないのもいいですね。人は、100%の幸せを失うと、もう二度と幸せになれないと思ってしまう。でも、30%くらいの幸せでもいいかな、と考えられたとき、自由が得られるのかもしれない。そのとき、悲しいことだけでなく楽しかった思い出もよみがえるのです。

失ったものを作り直す方法は人それぞれで、法則もないし誰も教えてくれません。そこで想像力を発揮し、生きる意味を見つけ出すのが人間です。この映画は、その希望を思い起こさせてくれるのです。(談)

STORY

ボストン郊外で便利屋として生計をたてる主人公リー(ケイシー・アフレック)は、兄の訃報を受け、故郷であるマンチェスター・バイ・ザ・シーに向かう。兄は遺言で残された息子パトリック(ルーカス・ヘッジズ)の後見人にリーを指名していた。驚き、戸惑うリー。二度と戻ることはないと思っていたこの街で、高校生のおいの面倒を見ながら暮らすうちに、過去の悲劇と向き合わざるを得なくなる。リーは過去を乗り越え、新しい一歩を踏み出せるのか――。